
プールサイド

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プールサイド

【Zマーク】

Z3554C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

水の中には、気持ちはいい。鼻をつまんで水底から空を見上げると、普通に空を見るよりもずっとキレイ。泳ぐのが好きな中学生・七海は、暇さえあれば学校のプールで泳いでいる。そんな七海をいつも、見ているのが小夜だった。

水の中にいるのは気持ちがいい。

鼻をつまんで水底から空を見上げると、普通に空を見るときよりもずっとキレイ。

ひかりが水にきらきら反射して、空も雲も太陽もゆりゆり揺れている。

どうして私はえら呼吸ができないんだろう、と想つ瞬間だ。もしも私にえらがあつたら、ずっと水の中にいるのにな。

実際には私はサカナでもなんでもなくて、ただの人間だから、1分もすると苦しくなつてくれる。

本当はもっと水の中から空をながめていたかつたけれど、おぼれるのはつまらないから、プールの底を蹴つて浮上する。

水の上に顔を出して頭を軽くふると、プールサイドの小夜と田川があつた。

小夜はこの暑いのにシャツのボタンを上までしめてリボンを結んで、学校指定の靴下までしつかりはいた状態で日陰に座つてている。この暑いのにマジメだなあ、なんて、私はぼんやりと小夜を見ながら思つ。

もちろん校則では、夏休みであつても校内では制服を着ること、とあるけれど、そんなことを守つてている子はけつこう少ないと思う。特にプールサイドでそんなかっこをしてる子は、ほとんどいない。今日みたいに顧問の先生がいないときなんて、みんなかなりいい加減だ。

「ねえ、別にずっとそこにいなくてもいいよ、暑いでしょ」

水の中から声をかけると、小夜はわずかに首を傾げた。おさげ髪がしゃらん、と搖れる。

「でもひとりでプールに入っちゃいけないって、決まってるじゃない？」

「そうだけど……別に平氣だよ、慣れてるし。私がおぼれたりしないの、小夜ならよくわかってるでしょ？」

「もちろん。でも、なにが起るかわからないもの。七海ちゃんになにがあつたら、どうするの？」

小夜に言われて、私はくちびるをとがらせた。

小夜の言つことも、もちろんわかる。

プールに入るとき、ひとりきりで入らなければ、といつのは安全のためだ。

いくら慣れている人間でも、足をつったり、突然のトラブルでおぼれたりすることがあるから。

でも別に、そんなことはじょつかずある」とでもない。
私みたいに、タイムをのばすために泳ぐのでもなく、ただ水につかってぼんやりとしている人間には、そんな危険はほとんどないと言つていいと思う。

それに、きっと、小夜は退屈なんじゃないだろ？か、と思うのだ。
水にも入らないで、ただ私をながめているも、とくにおもしろい」とはないとと思う。

いつもは本を読んだりしているのに、今日はなにも持っていないし。

「……あ、七海ちゃん、ちょっと休憩したほうがいいんじゃないかな。もう一時間も水の中にはいる」

小夜が校舎の時計を見ながら言つ。

つられてそちらを向くと、たしかに、水に入つてからとっくに一時間たつている。

「今日はあつたかいし、平氣」

でも、私は笑顔で答えた。

寒い日だつたら気をつけたほうがいいだろうけれど、今日はかなり気温が高い。むしろ、ずっと水につかっていたいくらい。

「ダメよ、そういうの、ちゃんとしないと」

小夜は怒ったように言つて、プールサイドに置いていたタオルを

持つてくれる。

仕方なく私は、プールからあがって、小夜からタオルを受け取つた。

「でも小夜、ずっと見てるだけつて退屈じゃない？」

私はまずは顔を拭いてから、帽子をとつて濡れた髪を吹いた。

小夜は私にくるりと背中を向け、日陰のほうへ歩きながら答える。

「七海ちゃんが泳ぐところ、見てるの、好きなんだけどな」

「そう？ 別におもしろくないと思つけど……。私、フォームきれいじゃないし」

「おもしろいよ。なんだか、サカナみたいでうらやましい」

ため息をつくみたいに言つてから、小夜は日陰に座つた。

日陰にいる、小夜の色の白さがいつそう際立つように、私には思える。小夜みたいな子のことを、全身砂糖菓子みたいな女の子といふのだろうと思う。

「サカナ……。まあ、水の中は大好きだけど」

私は歩きながらタオルをたたんで、小夜のほうへと近づいた。

「一步踏み出すことに、じゅっと足の裏についている水が蒸発していくのがわかる。」

コンクリートはじりじり焼けて、ずいぶんと熱かった。こうしてプールサイドで太陽のひかりを浴びていると、心底、早く水の中に戻りたいと思う。

そういう意味では、私はサカナに近いのかもしれない。

「私は泳げないから、うらやましいの。七海ちゃんみたいに泳げたら、きっと、もっと楽しいんだろうな」

小夜は太陽に手をかざしながら、ぽつりと言つ。

「でも小夜には小夜のいいところだつていつぱいあるよ。私、小夜がうらやましいこととか、いつぱいあるもん」

私はぺたんと、小夜の横に座つた。さすがに日陰だけあって、コンクリートは少し、ひんやりとしている。

「そう？」

小夜が首を傾げる。

「うん、そう」

私はうなずいた。

だつて、私には、どうして小夜が私の友達をやつているんだろう、と思うことがよくある。

小夜はふわふわと可愛らしくて、男の子にも女の子にも人気がある。

ずっと私と一緒にいなくても、小夜にはいくらいだつて、仲よくする相手はいるのだ。

それなのに小夜は、どういうわけか、いつも私と一緒にいる。

小夜と私は正反対だ。

小夜は、おとなしくて運動が苦手で、本を読んだりするのが好き。逆に私は、しとやか、なんて言葉にはまったく縁がなくて、運動以外にとりえもなくて、泳ぐのが好きで、本は読んでいると眠くなつて困るくらい。

テレビも、音楽も、洋服も、全部、小夜と私の好みは正反対だ。たまに、「うらやましい」と思つ。

私は絶対に、小夜みたいにはなれっこないから。

「でも、七海ちゃんが泳いでるの、見ると、なんだか水の中つていいなあつて思うの。自分も泳げたら楽しそうなになあつて……。ほら、私、全然ダメだから」

「泳ぐのつて別に、そんなに難しくないよ？ 今度、教えてあげる。一緒に泳ごうよ」

まかせなさい、と私は自分の胸を叩いた。

「…………うん、そうだね」

小夜は困ったように笑つ。

あれ、と思つた。

どうして小夜はこんな顔をしているんだろう。私、なにか、悪いことを言つたのかなと思つてしまつ。

「あ、七海ちゃん、別になんでもないの。気にしないで」

そんな気持ちが顔に出でてしまっていたらしく、小夜があわてて首をふった。

「そう? 本当に?」

私はじつと小夜を見て訊ねる。

「う、うん……なんでもないよ」

けれども、小夜は私から目をそらして、そっと息を吐く。やつぱりなにか隠しているんだ。

「小夜、隠し」と、してみるだしじょ?」

「……そんなことないよ」

答える小夜の声は、ずいぶんと弱々しい。

「嘘」

私は短く言つた。

「気になることがあるんだつたら、ちゃんと言つて。気になるよ」「別に、七海ちゃんは悪くないの」

そう答えた小夜は、今度は私をまつすぐに見つめていた。ああ、小夜は嘘なんかついてない。ひと目でわかった。でも、だとしたら、どうして小夜はあんなふうにうつむいたんだろ? わからなかつた。

じつと小夜を見つめていると、小夜はふいつと私から視線をそらして前を向いた。

「もう、来年にはここにいないんだよね。そう思うと不思議な気分にならない? 高校生とか言われても、全然、実感がわからないなあ」「私もそうかも。高校もプールが広いといいなあ。屋内プールだったら、冬も使っていいのに」

「七海ちゃんつて、本当にそればっかり」

小夜が吹き出す。

「だつて……好きなんだから、しょうがないじゃない」

私は頬をふくらませた。

「でも、いいなあ……。つらやましい」

「そうかなあ? あ、そういえば、小夜はビーチの高校行くの?」

「え？」

私の問いに、小夜は一瞬、大きく目を見開いた。

「……どうしたの？」

「あ、ううう。その……まだ、決めてないの」

けれどもすぐに笑顔に戻つて、ゆるやかに首をふる。

「そうなの？」

私が訊ねると、小夜はまた、うつむく。

「あの……ね、すぐに、つてこうわけじゃないんだけど。卒業したら、北海道に行くの」

「北海道？ 夏だったらいいけど、冬とかには行きたくないなあ。こっちよりずっと寒いんだよね。私、寒いのって嫌い」

寒いと泳げないし、とつけくわえて私は笑つた。

「……違うの、旅行じゃないの」

「え？ どうこうこと？」

「転校、するの。卒業まではここにいるけど……高校からは、北海道の高校に行くの」

私は目をぱちくりさせた。

北海道の高校に行く、つて。いつたいどうこうことなんだか。私はじつと小夜を見つめる。

小夜はなにも答えてくれない。

遠くで、セミがジリジリと鳴いていた。

「まだ、誰にも言つてないの。七海ちゃんに話すのが最初。あの……」

「じめんね」

「そんな、謝る」とないよ

どうして、とか、なんで、とか、たくさん言いたい」とはあるのに、私の口から出てきたのはそんな言葉だった。

それがわかつたのか、小夜は力なく笑う。

「お父さんの仕事の都合だから、仕方ないの。本当は最後まで言わないでおこうかって思つたんだけど、七海ちゃんこまかつておこうつて思つたから……」

小夜はきゅっと眉を寄せて、今にも泣き出しそうな顔になる。

「大丈夫だよ、北海道つて今、近いし。長い休みのときには遊びに行くよ、私」

「……うん。ありがと」

「小夜がぎゅうっと、私に抱きついてくる。

「わ、小夜！ そんな、濡れちゃう……！」

「本当に遊びに来てね」

小夜は私の驚きをよそに、強く強く、私の胸元に顔を押ししつけてくる。

濡れるなんてこと、小夜にはちつとも気にならないみたいだった。

「うん、もちろん行くよ」

私はおそるおそる、小夜の背中にさわった。

ふるふる震える小夜の背中を、濡れて冷たくなっている手で、そつとなでる。

「本当は行きたくないのに」

「……うん」

私はうなずいた。

なんだか、私はまだ、ふわふわとした気持ちのままだった。

小夜が転校してしまって、というのはわかつた、よつな気がする。

でも多分、私はまだ、実感としてそれを理解してはいなかつた。

なんだか、あまりにも突然過ぎて、本当のことのように思えない。

小夜とは違う高校に行くのかなと、ぼんやりと考えたことはある。でもあくまでぼんやりと、であって、しっかりと考えたわけではなかつた。

私と小夜は成績も違うし得意なものも違うから、きっと違うところに行くんだろう、それくらいの予測だつた。受験生とはいっても、本人たちは意外にのん気なもので、3年生の夏休みあたりでは、まだまだ進路なんて決まっていない。

「それに……私が別の高校に行つたら、七海ちゃん、絶対、無理ばっかりするもの。心配なの」

小夜は顔をあげて、[冗談を言つよつうな口調で言つて笑つた。

「あ、ひつどいなあ」

私はわざと、思いきり頬をふくらませた。

小夜が吹き出す。

「……ね、七海ちゃん、私が北海道に行つても、ずっと友達でいてね

笑い転げながら、小夜が言つ。

「当たり前だよ、なに言つてるの」

ペシリと私は小夜の額を叩いた。

そして、小指を差し出す。

小夜は一瞬びっくりしたような顔をして、そのあとすぐには、私の小指に自分の小指をからめてきた。

小夜の小指は、ほんの少しだけ、震えている。

でも私はそれに気づかないふりをして、小夜に頬を寄せた。

くつづいたところがじつとりと汗ばんでいく。でもそんなこととも気にしない

で、私はずっと、そうしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3554c/>

プールサイド

2010年10月8日15時10分発行